



Amir Tsarfati

[来たる君]

アミール・ツアルファティです。今日は、「棕櫚（しゅろ）の主日」ということで、特別メッセージをご用意しました。タイトルは『The Coming Prince（来たる君主）』。

まずは、お祈りから始めたいと思います。

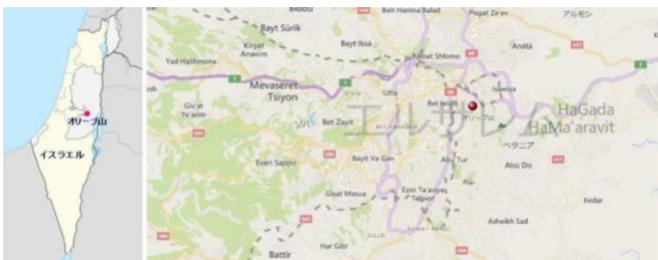
お父様、あなたの御言葉に感謝します。あなたの約束に感謝します。あなたが、預言者を通して与えてくださったすべての約束の成就である、イエス様に感謝します。そして、主の初臨が世を裁くためではなく、救うためであったことを感謝します。私たちはまだ、イエス様が十字架の上で流された血潮によって救われることの出来る時代の中にいます。彼が初臨で来られたのは、そのためです。お父様、このメッセージが人々の心に届きますように。そして、まだ備えの出来ていない人たちに対して、あなたが、あなたの御言葉を通して語ってください。それによって彼らが、今、決断しますように。イエス様の再臨は、世を救うためではなく、裁くために来られるのだということを、私たちは知っています。お父様。あなたは遅れているのではなく、忍耐深くあられるのだ、ということに感謝します。あなたは、一人として滅びることを望まず、皆がイエス様によって救われることを望んでおられます。あなたが、とても忍耐深い神であられることに感謝します。主イエスの御名によって、感謝と祝福の祈りをお捧げします。アーメン。

アーメン！

皆さん、シャローム。アミール・ツアルファティです。今日は2018年3月25日の日曜日。公式に「棕櫚の主日」で知られる日です。良い知らせと、悪い知らせがあります。良い知らせは、確かにイエスはエルサレムに入れ、人々は棕櫚（書記注：しゅろ・ヤシ→中東ではナツメヤシが一般的）の枝を振りました。悪い知らせは、聖書のどこにも、それが日曜日であったとは書いてありません。ヨハネの福音書12章1節には、それが「過越の祭りの6日前」だったと書かれています。

- 1 イエスは過越の祭りの六日前にベタニヤに来られた。そこには、イエスが死人の中からよみがえらせたラザロがいた。（ヨハネ 12:1）

では、もし、過越の祭りが金曜日だったと私たちが信じるなら… 十字架刑ではなく、過越しですよ？ 多くの人々が、金曜日だと信じる理由は、これがダブル安息日であるためで、安息日の“安息日”ではなく、祭日の“安息日”です。そして結論として、その6日前であることから、イエスは、日曜日にエルサレム入りしたと考えられています。非常に興味深いのは、そうであれば、その日イエスがろばに乗って、ベタニヤからはるばるオリーブ山を通過して、キデロンの谷に向かって、何の問題もなく来られた事にも、辻褄が合うのです。そこで起こった事についても後ほど見ていきますが、その前に、皆さんにまずお話ししたいのは、イエスの「勝利の入城」として知られる事についてです。イエスは、彼の 主権性や メシア性、彼の神性、神格



イスラエル全図で見る
オリーブ山の位置（左）と ベタニヤ周辺地図（右）

について複数回語っておられます。しかし彼は、何となく、周囲の人間全員にはそれを知らせないようにしておられました。人々が、主を褒め称えようとした時、彼は いつもそれを許しませんでした。それが、イエスが ろばに乗ってエルサレムに入城される時、過越しの6日前、—— 過越しとは、解放・自由のお祝いです。奴隷の身分からの解放を祝います。その6日前に、イエスは ろばに乗って、エルサレムに入城されました。興味深いのは、この時彼は、唯一、人々が彼を褒め称えるのをお許しになっただけでなく、もし、人々がそれをしないなら、石がそれをする、石が叫び出す、と言われました（書記注：ルカ 19:40 参照）。ですから、この日は非常に特別な日であったことが分かります。人々が、彼を「来たる君主」として知っているべき日であることを —— イエスは、分かっておられました。「来たる君主」とは、預言者ダニエルによって定められていること（書記注：ダニエル書 9:24~25 参照）ですが、さらに「ろばに乗った王」について、ゼカリヤ自身も9章9節で語っています。それから、非常に興味深い事が起こります。

- 12 その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、
 13 しゅろの木の枝を取って、出迎えのために出て行った。そして大声で叫んだ。
 「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。」
 14 イエスは、ろばの子を見つけて、それに乗られた。それは次のように書かれているとおりであった。
 15 「恐れるな。シオンの娘。見よ。あなたの王が来られる。ろばの子に乗って。」
 （ヨハネ 12:12~15）



ルーベンス画
 「キリストのエルサレム入城」

このように、ヨハネ 12章12~15節で、ゼカリヤ書9章9節が引用されています。そこで、人々は大声で叫んでいます。恐らく、彼らは分かっていたかもしれませんが、イエスは、書かれているとおりに「ろばの子を見つけ、それに乗られ」（ヨハネ 12:14）ました。彼は、はっきりと分かっておられました。非常に面白いですね。ルカ 24章44節で、イエスは弟子たちに言われました。

- 44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇に書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」
 （ルカ 24:44）

イエスは、旧約聖書の中で、彼について書かれていることは全て、小さな言葉から句読点に至るまで、はっきりと意識しておられました。皆さん、理解しておかなければなりません。イエスは、教会で説教されたことは一度もありませんし、そのろばに乗って、他の町に入られたこともありません。それから、彼は当時、新約聖書のどの箇所も成就しておられませんでした。新約聖書は、まだ書かれてもいなかったのです。イエスによれば、彼はユダヤ人のところに来て、ユダヤ人のエルサレムに入城し、聖霊によってユダヤ人の預言者を通して彼らに与えられた預言を、成就しておられたのです。ですからイエスは、完全にその日を認識しておられたことが分かります。彼が、エルサレムに入城する日は、まだ「苦難のメシア」としてではなく、実際には、王としてです。人々は、彼を「入城する王」として祝福しました。ここで、たぶん皆さんは「なぜ、王がろばに乗るのか？」と不思議に思っておられるでしょう。私も、同じことを思ったのです。そして、旧約聖書はもちろんのこと、私がずっと読んでいた本を調べました。そこで気づいたのは、ユダヤ人の王にとって、平和のために来るときに、ろばに乗るのは、共通の慣習だったのです。通常、王が平和のために行くときはろばに乗り、戦いのときは馬に乗りました。面白いのが、第一列王記1章33節の、ダビデがソロモンを王にする場面です。

- 33 王は彼らに言った。「おまえたちの主君の家来たちを連れて、私の子ソロモンを私の雌ろばに乗せ、彼を連れてギホンへ下れ。」
 （第一列王記 1:33 新改訳 2017）

ソロモンの兄弟が王になろうとしましたが、ダビデには、彼ではなく、誰が王になるべきか、はっきりと分かっています。そして、ご存知の通り、ソロモンがろばに乗りました。士師記 5 章 10 節、10 章 4 節、12 章 14 節にもそれは書かれています。

10 黄かつ色のろばに乗る者、さばきの座に座する者、道を歩く者よ。よく聞け。

(士師記 5:10)

4 彼（ヤイル）には三十人の息子がいて、三十頭のろばに乗り、三十の町を持っていたが、それは今日まで、ハボテ・ヤイルと呼ばれ、ギルアデの地にある。

(士師記 10:14)

14 彼（ピルアトン人ヒレルの子アブドン）には四十人の息子と三十人の孫がいて、七十頭のろばに乗っていた。彼は八年間、イスラエルをさばいた。

(士師記 12:14)

第二サムエル 16 章 2 節では、ダビデ自身が、メフィボシェテのしもべ ツィバに話す時、ろばに乗っています。

2 王はツィバに尋ねた。「これらは何のためか。」ツィバは答えた。「二頭のろばは王の家族がお乗りになるため、パンと夏のくだものは若い者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で疲れた者が飲むためです。」

(第二サムエル 16:2)

ですから、ユダヤ人の王たちは、戦争ではなく、平和の中で訪れる時は、ろばに乗っていたのが分かります。



アミールのペンダント(左)に描かれているしゅろの木でヘロデ・アンティパスの顔が消されたコイン(右)

次に、私たちが自問するのは、イエスがろばに乗って来られたということは、彼がエルサレムに入城されたのは、誰かと戦うためではなく、平和をもたらすためなのか？ ということです。しかし、彼は平和のために訪れましたが、人々はしゅろの枝を振っていました。期待と見事に衝突したのです——しゅろの枝です。この、ユダヤ人の反乱者たちによって造られた、1900年ものコインをご覧ください。ここには、しゅろの木（ヤシの木）があります。1900年ものです。私はこれを、いつも肌身離さず身に着けています。私の民族の人が、自由と独立の希望を持って、

1900年前にこのコインを造ったのです。私が1972年に、この国で自由の身として生まれた時には、エルサレムは既にイスラエルの首都でしたが。ともかく、興味深いのは、人々はその思いの中に、違うことを考えていたのです。彼らの思いにあったのは、「勝利」でした。彼らは、イエスが平和のために訪れることは期待しておらず、イエスが「戦いのために」来られることを期待していたのです。

それをよく考えてみると、人々は、彼がろばに乗っているのを見たとき、すでに何かとんでもない間違いがあると気づいたでしょう。それだけでなく、イエスがろばを止め、エルサレムを見て泣かれた時には、どんな王だと思ったでしょう。この国をローマの手から勝ち取って、自分たちを解放してくれる、と思ったのに、彼は止まって泣かれたのです。彼らには、わけの分からない事がいくつもありました。そして、しゅろの枝といえば、——しゅろ（ヤシ）の木の枝は、ギリシャとローマ帝国一帯で使われていたもので、実際、それよりもずっと以前から、これは常に、政治的自由と独立の象徴として使われていました。実際、弁護士が訴訟に勝利すると、ローマのやり方では、彼の家の戸口の上に、しゅろの枝をぶら下げていました。ですから、彼らの家の側を通り、しゅろの枝があると、その弁護士が勝訴したのだということが分かりました。

ともかく、しゅろの枝についてお話をしました。それから、ユダヤ人達には、一つの期待があったこともお話ししました。イエスには、他の目的があり、イエスは平和のために来られました。興味深いのは、これについてよく考えてみると、それには政治的及び 軍事的な勝利の意味がありましたが、全く別の事が起こります。彼は泣かれました。それは勝利でしょうか？ それから、彼が訪れた時にも、非常に大きな意味がありました。ということで、イエスは、エルサレムをご覧になって言われました。

42 …「おまえ（エルサレム）も、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

44 そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

（ルカ 19:42~44）

それから、興味深いのは、イザヤ書 9 章 6 節

6 ひとりの みどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

（イザヤ書 9:6）

彼の称号の一つが「平和の君」です。イエスは、平和をもたらすために来られました。もし、エルサレムが、平和の事を知ってさえいたなら、イエスの誕生、彼の死、彼のよみがえりによって平和をもたらすことが出来る。聖書には、第二テサロニケ 3 章 16 節にこうあります。

16 どうか、平和の主ご自身が、どんな場合にも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。

（第二テサロニケ 3:16a）

平和の主、平和の君は、世が与えることの出来ない、理解をはるかに超える平和を与えることが出来るのです。これは、世が与えることも、理解することも出来ない平安です。ということで、イエスはエルサレムに入城されます。イエスは、エルサレムに平和をもたらそうとされましたが、彼らは平和をもたらすものを知りませんでした。彼らは、その目的も、時も、両方を理解しておらず、神の訪れを逃したのです。彼らは、神の訪れの時を知らなかったのです。非常に興味深いのは、次にイエスが、エルサレムに入城された時について見てみると、聖書には、彼が ある特定の日に入城されたと書かれています。 来たる君主について書かれている書には、著者は基本的に、エルサレム の城壁と神殿が回復した時からである、と告げているのです。「行って、エルサレムの都と神殿を再建せよ」との命令が、（書記注：アケメネス朝ペルシャのアルタシャスタ）王から出されてから、ぴったり 173,880 日です。ネヘミヤが語っている事から数えてみると、2 章です。

1 アルタシャスタ王の第二十年のニサン月に、王の前に酒が出たとき、私は酒を取り上げ、王にそれを差し上げた。これまで、私は王の前でしおれたことはなかった。

2 そのとき、王は私に言った。「あなたは病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように悲しい顔つきをしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私はひどく恐れて、

3 王に言った。「王よ。いつまでも生きられますように。私の先祖の墓のある町が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして悲しい顔をしないでおられましょうか。」

4 すると、王は私に言った。「では、あなたは何を願うのか。」そこで私は、天の神に祈ってから、

5 王に答えた。「王さま。もしもよろしくて、この しもべを いれてくださいますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある町へ送って、それを再建させてください。」

6 王は私に言った。—— 王妃も そばにすわっていた —— 「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って来るのか。」私が王にその期間を申し出ると、王は快く私を送り出してくれた。

(ネヘミヤ記 2:1~6)

この出来事が、ある特定の時、特定の日、特定の年に起こったのです。そして、行って再建せよ、との勅令がネヘミヤに出された瞬間、—— これは、ただ神殿だけではありませんよ？ 神殿を再建せよ、との勅令は、何度か出されているのです。しかし、これは都。初めてです。その瞬間から、BC 445 年 3 月 16 日に、その勅令が出されたことが分かっています。それに全日数を足すと、——ユダヤ暦では一年は 360 日です。これら全てから 483 年に 360 日をかけると、173,880 日で、AD 32 年 4 月 6 日に当たり、ぴったり過越の祭りの 6 日前になるのです。イエスがエルサレムに入城されたのは、預言者ダニエルが、それが起こると告げた、まさにその日でした。興味深いのは、ダニエルが 9 章で「君主が来る」と告げ、時系列を告げているのです。勅令から 69 週、483 年経って、それからメシアが来る、と。彼は、ただ「メシア」とは言わず、「油そそがれた者、君主」と言っています。彼は「君主」もしくは「王」のことを言っており、ヘブル語では「ナギール נָגִייל」です。ところで、非常に興味深いのは、反キリストでさえ、というより、ローマ教皇もまた、同じ章の中で「ナギール」と呼ばれています。ですから、「メシアである君主」と「ローマ人の君主」です。そして、ご覧の通り、イエスは AD 32 年 4 月 6 日に、群衆が彼をメシアであると宣言する中、エルサレムに入城されました。彼らは、彼をそう受け入れたのです。 実際は、イエスが、人々がそれをするのを許されたのは、これが初めてでした。それから、彼がパリサイ人達に

「もし彼ら が叫ばなければ」… 誰が？

「石が叫ぶ」と言われたのです。イエスは、理解されていたのです。その瞬間、あの“棕櫚の主日”の日曜日の、彼のエルサレム入城は、「彼が来られる」と言った 預言者イザヤと、「彼はろばに乗って来る」と言った預言者ゼカリヤの両方の預言が、そのまま成就したのです。さらに、預言者ダニエルは、「まさにこの日に彼が来る」と言ったのです。非常に面白いですね。

では、エルサレムは準備が出来ていたでしょうか？ もちろん、出来ていませんでした。何故、エルサレムは準備が出来ていなかったのでしょうか？ それは、ユダヤ人たちは純粋に… ちなみに、今でもそうですよ？ 彼らは、所属だけで救われると信じているのです。

「天国に行くためには、ユダヤ人であるだけで十分」だと。

ところで、皆さんに言っておきたいのは、アメリカ人のクリスチャンの牧師たちにも、それを信じている人たちがいますよ。彼らは、二重契約を説教して、ユダヤ人であるだけで天国に行ける、と本気で信じているのです。実際、1980 年代にメシアニック・ジューが書いた本でも、その“広い道”を示唆しているのを、私は知っていますよ。

「祈りと嘆願によって、イスラエルは、明確にメシアを信じていなくても救われる」

と。当然、それは間違いですよ。当然、それは御言葉に反しています。実際、イエスは

6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。

(ヨハネ 14:6)

とユダヤ人に向かって言われています。だからエルサレムは準備が出来ていませんでした。エルサレムは準備が出来ておらず、エルサレムの人々は、“苦難のメシア”の部分を飛ばして、統治する王を求めていたのでしょうか。それは、人々が自分たちの罪の結果に気づいていないか、自ら選んで否定しているかのどちらかです。ところで、これこそが、世の中の問題ですよ。 罪の結果を、人々は理解していません。もしくは、彼らはただ、自らそれを

否定することを選んでいのです。だから彼らは、犠牲の必要性を理解せず、支払われるべき代価があることを理解しないのです。そして、ユダヤ人が心を頑なにしたから、彼らを盲目にされたのは、神です。地球上の他の国は、どこも国としてではなく、個人がサタンによって盲目にされているのに対して、イスラエルは唯一、神が盲目にされた国です。聖書には、ローマ書 11 章にこうあります。彼らが心を頑なにしたから、

8 …「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞けない耳を与えられた。今日に至るまで。」

(ローマ 11:8)

ローマ書にはさらに、こうあります。

11 … 彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。

(ローマ 11:11)

ですから、イスラエルの違反、イスラエルの盲目は一時的なものです。そして、彼らがイエスのメシア性と神性を認識した時、彼らは受け入れられます。

イエスは、預言者が「来る」と予測した、まさにその日にエルサレムに入城されました。今日、私はそれに加えて言いたいのは、イエスは、預言者が「来る」と言った、まさにその日に、エルサレムに戻って来られます。皆さん、理解しなければなりません。イエスの初臨は、聖書が告げる通り、ただの「訪れ」だったのです。留まるつもりはなく、聖書にはヨハネの福音書 3 章 17 節、12 章 47 節に、「彼が世に来たのは、さばくためではなく、救うためだ」と書かれています。

17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

(ヨハネ 3:17)

47 … わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。

(ヨハネ 12:47b)

初臨は、罪を裁くためではなく、罪の問題から世を救うためです。初臨の時は、そのために来られたのです。しかし、再臨の時、彼がエルサレムに戻って来られる時には、黙示録 19 章 11 節、ゼカリヤ書 14 章 3 節にある通り、戦い、裁くために来られます。

11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。(黙示録 19:11)

3 主が出て来られる。決戦の日に戦うように、それらの国々と戦われる。

(ゼカリヤ書 14:3)

そして、良いですか？ その時には、ろばではありませんよ！ その時は、確実に馬に乗ってやって来られます。

イエスは、棕櫚の主日、ろばに乗ってエルサレム入城されました。平和のために来られ、エルサレムに「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。」と言われたのです。平安を差し出されました。その同じ平安を、今日も差し出しておられます。皆さんも、エルサレムと同じ状態です。ある人たちは、宗教熱心な家庭に生まれたかもしれませんが。カトリックやオーソドックス、ムスリム、仏教、神道、ユダヤ教家庭に生まれて、自分は大丈夫だ、と思っているかも知れません。でも、あなたは理解していない。あなたは、大丈夫ではありません。あなたは 罪びとです。そして、あなたも恵みによって救われることが出来るのです。救いを得るために、あなたに出来る働きは、過去にも、これからも、一切ありません。ただ、2000 年前に十字架の上で、すでに完了されていることを信じるだけです。

時と季節について、聖書には、私たちの生きている時代について、

7 不法の秘密はすでに働いています。

(第二テサロニケ 2:7)

とあります。私たちは、サタンの欺きを、世界中に見ています。皆さん、言っておきますが、それは世界中にです。私のところには、毎日メールが届くのですが、人々が信仰を離れているのです。彼らは、自ら「エホバの証人」に入ったり、他のカルト宗派に入って、キリストを「ただの神の御子」とし、もはや彼の神性を信じていません。聖書の至る所に、彼は主であり、救い主であり、神であることが書かれています。ローマ書 9 章や、テサロニケ人への手紙にもです。勝利の入城の話は、一つの対比です。この対比は、信者にも当てはまります。これは、卑しいしもべとして、ろばに乗ってやって来た、王の話です。高貴な馬ではありません。王の上着を着てではありません。そうではなく、貧しく、へりくだった身なりで来られました。イエスが来られる時は、この世の王のように、力づくで勝ち取るのではなく、愛と恵みとあわれみによって、勝ち取られます。それと彼の民のために、自らの犠牲によって、ご自身をささげられました。彼は軍の王でもなければ、壮麗な王でもなく、身分の低いしもべとして、—— 彼は、国々を征服されず、しかし、心と思いを征服されます。彼のメッセージは、神との平安の一つであって、一時的な平和ではありません。地上の平和だけでもありません。もしイエスが、あなたの心の中に、勝利の入城をされるなら、彼は、そこを愛と平安で統治されます。彼に従う者として、私たちはそれと同じ質を示さなければなりません。そして、私たち全員の内側に住み、統治し、勝利された王を、世に見せなければなりません。

そこで、今日、お伺いしたいのは、あなたへの訪れは、どうですか？ あなたは、準備ができていますか？

イエスが死なれた、これは事実です。問題は、あなたは、彼があなたのために死んだことを、信じますか？ 今が、あなたの時だと私は強く思います。イザヤ書 49 章 8 節、第二コリント 6 章 2 節にある通り、今は「恵みの時、今は救いの日」です。皆さん、言っておきます。これは見事な描写です。

ところで、こうして話をしている間にも、ガザからイスラエルに向けてロケットが飛んで来ていて、ガザ周辺のイスラエル入植地では、ずっと警報が鳴っています。ただ、皆さんにお伝えしておきたいのは、面白い事に、しゅろの枝を振っていた人たちは、間違った期待を持っていました。しかし、また他にも、訪れを逃す人たちがいます。主の訪れではなく、彼らの訪れを、です。私たちの訪れは天国だ、と私は強く思っています。彼の訪れは、地上でした。聖書には、彼は来て、私たちを彼のもとに迎えてくださる、と書かれています。彼のおられる所に、私たちもいるためです（書記注：ヨハネ 14:3 参照）。私たちは取り去られ、イエスのところに行くのです。しかし、それは長期間ではありません。最長で 7 年です。なぜかと言えば、時が来て、大患難の終わりが来れば、彼が来て、その足がオリブ山の上に降り立つのです。私たちも、彼と一緒に来るのですよ。私たちは、あの天の豪邸には、たったの 7 年しかいないのです。それは、私たちの訪れです。イエスが来られて、地上を訪れられたように、私たちの天の訪れです。そして、彼の訪れを逃した人たち、イスラエルのように、主が、彼の教会をここから連れ去ることを信じない人々には、非常に興味深い事が起こります。大患難を通して、多くのユダヤ人が救われることが分かっています。黙示録 7 章で、144,000 人が、全ての部族であることを告げていて、それから「その後」と書かれています。

9 その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手を持って、御座と小羊との前に立っていた。

(黙示録 7:9)

彼らは、大患難時代に救われる聖徒たちです。つまり、彼らは、大患難を通らなければならないのです。

彼らは、彼らの訪れを逃してしまったからです。皆さん、言うておきます。今がその時、今日が救いの日です。間違った目的で、しゅろの枝を持っていたくはないでしょう。それから、大患難など、本気で経験したくはないでしょう。そうすれば、恐らく天国でしゅろの枝を持つことになります。言うておきますよ。あなたには、心の中に“平和の君”が必要です。その日が来ることは、私たちには分かっているのです。聖書のローマ書 11 章 25～26 節には「異邦人の時が満ちれば、イスラエルの全家が救われる」と書いてあります。それまでイエスは戻って来ません。彼が、まず最初に来られた時には、特定の時期があったことも分かっています。唯一、私たちに分からないのは、私たちがここを去るその日、その時間だけです。そこで、皆さんに質問です。

あなたは幸せですか？

あなたは勝利していますか？

あなたは彼を知っていますか？

彼の、よみがえりの威力を知っていますか？

あなたには、平安がありますか？

あなたは、へりくだって、ろばに乗って来た 彼のような しもべですか？

彼がエルサレムに対して泣かれたように、あなたには、迷い出ている人たちに対する想い がありますか？

エルサレムに対しては、ゼカリヤ書 12 章と 14 章から、エルサレムが大きな戦争の場になるだけでなく、キリストが戻って来られる場所となることも分かっています。彼の足がオリーブ山に降り立ち、王座を設け、その時、イスラエルの全家が救われます。ローマ書 11 章 26～27 節がそう告げています。

皆さん、来たる君主。彼は最初ろばに乗ってやって来られました。彼が、次に地上に戻って来られる時には、馬に乗って来られます。初臨と再臨の間の、あなたの人生、そして初臨と再臨の間の、あなたの選択によって、彼が戻って来られる時に、あなたが彼の後ろで馬に乗っているか、彼と聖徒が戻って来るときに、馬に正面から対面し、そして裁判と裁き、残念ながら滅びに直面するのかが決まります。騙されてはいけません。イエスは、世を救うために来られました。しかし、再臨の時には、彼の敵を滅ぼすために、彼は戦いの人として来られます。そして、私たちには、この地上にいる時間は、ほんの数日、数週間、数ヶ月しか残っていない事を、あなたは理解しておくべきです。彼は、あなたを招いておられるのです。

20 見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(黙示録 3:20)

イエスは、今日、あなたと共に食事をすることを望んでおられます。彼は、あなたにはただしゅろの枝を持つだけでなく、彼が、あなたを受け入れ、あなたにも、彼を心に受け入れて欲しいと願っておられます。外見的には、あなたの好きなように見せかけることは出来るでしょう。しかし、大事なものは、外側ではありません。内面です。あなたの人生、あなたの心で、イエスが王であるかどうかです。皆さん、彼は紳士です。あなたの心に、無理やり押し入るような事はなさいません。あなたが、彼に「来てください」と言えば、彼は入ってくださいます。祈りましょう。

お父様、あなたの御言葉に感謝します。あなたのタイミングに感謝します。あなたの警告に感謝します。あなたが示してくださった愛に感謝します。あなたは、あなたの子どもたちには救われてほしい、しかし、強引に押し付けることはしない、と言われました。私たちが選ばなければなりません。あなたの恵みによって、あなたはモーセに言われました。

「わたしは、いのちと死を、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」(申命記 30:19)

イエスが道であり、真理であり、いのちであることを知り、あなたは、私たちに「彼を選べ」と言っておられます（ヨハネ 14:6）。お父様。今日が救いの日となりますように。そして、新しい魂が加わり、いのちの書に、新しい名前が書き加えられたことで、天の御使いたちに喜びが湧き上がりますように。今日、あなたに感謝し、あなたを祝福します。イエスの御名によってお祈りします。

アーメン。

ありがとうございます。God bless you!
ガリラヤより、シャローム。さようなら。

2018年3月25日 初回公開

【写真出典一覧】

- ・イスラエルの地図とオリーブ山周辺地図 : Livedoor Blog 「 聖書の地と聖地 Renaissance 」 2016. 2. 17 「オリーブ山（イスラエル）」
- ・ルーベンス画「キリストのエルサレム入城」 : 1632 デュシヨン美術館蔵
- ・アミールさんのペンダント : 動画より
- ・しゅろの木でヘロデ・アンティパスの顔が消されたコイン : ブリッジズ・フォー・ピースティーチングレター 2002年2月号「イエスと熱狂党」
- ・ヘブル語の表記 : 牧師の書斎「エゼキエル書・28 ツロの王に対する哀歌」 2013. 6. 19



スマートフォンなどのカメラで読み込むと、このメッセージを YouTube で見られます。
≪リンク先 : <https://youtu.be/NonPMQ2b7p4> ≫



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel 2021.03.26
<https://beholdisrael.org>

ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル 
<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

